シネマ女性学

鉄柵越しの結婚式

松本 侑壬子・ジャーナリスト

ゴラン高原と聞いて、「日本赤軍の…」「重信房子の潜伏先…」と連想するのは、今となってはやはり“時代遅れ”の謗りは免れないだろうか。しかも、実は具体的なことは何もわかってはいなかったのだ。

今、この国境の通過許可を待って鉄柵の前に何時間も座り続けるウェディングドレス姿の花嫁、彼女を迎えに来た花婿側の一団は、はるか鉄柵の向こうに足止めされていて、時折ハンドマイクで「おーい」とこちらに呼びかける。これが結婚式？　そう。これがゴラン高原の今の現実なのだ…。

イスラエル占領下のゴラン高原、マジュダルシャムス村。ここはもともとシリア領だったが、1967年の第3次中東戦争でイスラエルに占領されたため、住民の多くは無国籍者となり、新たに引かれた境界線の向こうの親戚とも自由に往来できなくなってしまった。

今日は村の娘モナが親戚にあたるシリアの人気俳優タレルと結婚式を挙げる日だ。軍事境界線を隔てた地域に住む2人は、まだ互いを写真でしか見たことがない。それでもモナは、タレルとの新しい人生に夢を懸け、胸を膨らませている。

村人は、境界線を一度越えると、シリア国籍が生じるため、二度と故郷には戻れない。モナはそれを覚悟の上だ。その手続きのために国連事務所の国際赤十字職員の若い女性ジャンヌが、モナの通行証を持ってイスラエル側とシリア側の係官の間を何度も何度も往復する。スタンプ一つでモナの命運は左右されるのだが、双方の係官の言い分は食い違ったまま何時間も過ぎていく。人種と利害、絶望と憎悪、官僚主義と無責任、複雑な手続きといい加減、国際政治と地域政治、宗教問題、・・・何とも複雑なこの地の気風を、人は楽観主義と悲観主義を兼ねる「オプシミズム（楽悲観主義）」で強引に乗り切って行かねば何事も動かない。

モナの家族も単純ではない。長兄ハテムはロシア人女性と結婚して村を出たため勘当の身。外国で商売をしているお調子者の次兄マルワンは、かつては国連職員ジャンヌと訳ありだった。一番モナと親しい姉のアマルは、実は保守的な夫と別れて、大学に入学しようと画策している。

一家の長たる父親のハメッドは、親シリア派の政治活動で投獄された経験もあり、イスラエル警察に睨まれている。今日も家族の必死の反対を押し切ってデモに参加したため、軍事境界線から父を連れ戻しにイスラエル警察がやって来た。嫁ぐ愛娘に今生の別れを告げて連行されようとする父親を救ったのは、長男ハテムの一言。「僕は弁護士だ。逮捕状は？」。シリア側で暮らす末弟のファーディーは、柵の向こう側でそんな家族をはらはらして見守る。

てんやわんやのトラブルがようやく収まりかけたその時に、今まで我慢強く柵の前で待っていた花嫁モナが思いがけない行動に出た…。

ゴラン高原もイスラエルの占領地も“ニュースの地名”などではない。困難な状況を、知恵を結集し共に乗り越える濃密な家族の愛が息づく“人間の土地”なのだと、この映画で知った。

『シリアの花嫁』

イスラエル・仏独合作(97 分)／エラン・リクリス監督

2 月 21 日より岩波ホールにてロードショー